大学生におけるデジタル認知症の傾向研究

橋本 拓夢† 宮本 武† 安達 和年† 藤田 智子†† 小田井 圭†
† 国士舘大学 †† 玉川大学

1. はじめに

デジタル認知症とは、デジタル機器（特にスマートフォン）に依存することで、記憶力の低下や言語の障害など認知症と同じような症状を発生させる状態のことである。認知症と似た症状を発症させるため「デジタル認知症」と言われているが、病気としての認知症とは別で、病気ではない。ただ、若い人ほど影響を受けやすく、悪化すると若年性認知症（６５歳未満で発症する認知症）になると言われている。また、子供の頃にスマートフォンに依存すると脳にダメージを与えてしまう可能性も指摘されている。本研究の目的は大学生を対象とし、スマートフォンをどのように使用することでデジタル認知症になる傾向があるのかをアンケート調査などを実施することで明らかにすることである。そのためまず最初の取り掛かりとしてスマートフォンの利用状況について、大学生を中心にアンケートを実施した[1]。また、脳波測定を実施して、アンケート結果と比較することで「デジタル認知症」との関係性を確認した。その結果を分析したので報告する.

2. アンケート

アンケート[2]は行動チェック,脳チェック,心身健康チェックの 3 分野に分かれている。各分野 10 個の質問項目からなり、20 項目以上が Yes だと危険度大,10～19 項目は危険度中,9 項目以下だと危険度小となる.

3. 結果

アンケート結果を図 1～3 に示す。行動チェックでは、6 割以上が該当する項目は 5 項目であった. 脳チェックでは、35%以上の人が該当する項目数は 3 項目であった. 心身チェックでは、特筆する結果

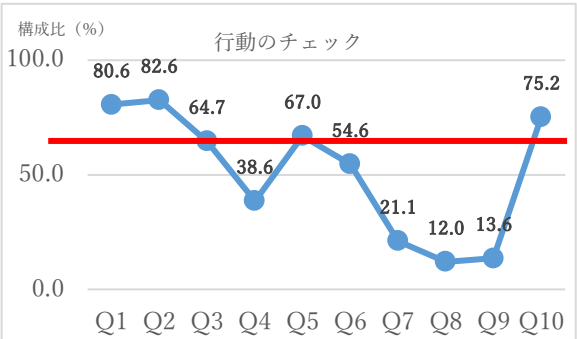

図 1　行動チェックの回答

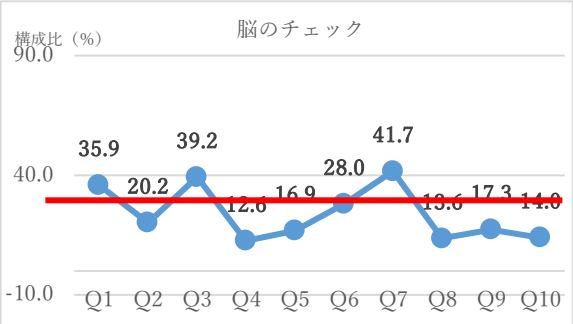

図 2　脳チェックの回答

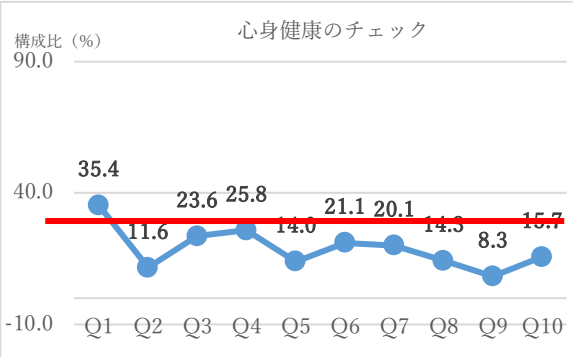

図 3　心身健康のチェックの回答

が出ていない。但し,該当項目数が 20 項目以上となった学生は 20 人いた。脳波測定を、アンケートの該当目数の多い学生と、少ない学生について実施した。認知症患者の脳波[3]との比較結果などについては、当日報告する。

4. まとめ

今回, 大学生のスマートフォンの依存度について, アンケートと脳波測定を中心に調査をした. 調査結果から思うような相関や有意差は出てこなかった。アンケートの質問項目を大学生向けに変更するなど改良を検討している.

参考文献

[1] 安達 和年, 藤田 智子, "大学におけるデジタル認知症の現状について", 国士舘大紀要情報科学 **39**, pp14-21 (2018)
[2] 奥村 歩, "その「もの忘れ」はスマホ認知症だった", 2017, 青春出版社
[3] 高梨淳子, "認知症の脳波検査", 医学検査 **66**, pp55-61 (2017)

Copyright © 2019 IEICE